

P1-13.**進行性前立腺癌におけるホルモン治療後の再燃の検討**

(社会人大学院三年・泌尿器科学)

○下平 憲治

(泌尿器科学)

中島 淳、大堀 理、小津兆一郎
大野 芳正、堀口 裕、並木 一典
吉岡 邦彦、秦野 直、橘 政昭

【目的】一般的に進行性前立腺癌においてホルモン療法は奏功するものの、いずれ再燃する。本研究においては、進行性前立腺癌において、ホルモン治療後の再燃の予測因子について検討した。(対象と方法) ホルモン治療が施行された stage C 以上の進行性前立腺癌症例のうち、初期治療として手術や放射線治療が施行されず、ホルモン治療が施行された 70 例を対象とした。平均年齢は 77 ± 1 歳 (中央値 77 歳) であり、平均血清 PSA 値は 581 ± 226 ng/ml (中央値 52 ng/ml) であった。ホルモン治療として LHRH analogue と抗アンドロゲン剤を用いた maximum androgen blockage (MAB) が施行された後に、一度下降を示した血清 PSA 値がその後 3 回上昇した場合を再燃とした。非再燃率の算出は Kaplan-Meier 法を用い、再燃の予測因子については Cox 比例ハザードモデルを用いて検討した。【結果】単変量解析において performance status (PS) 1 以上の症例、ヘモグロビン (Hb) 12 以下の症例、血清 prostate specific antigen (PSA) が 300 ng/ml 以上の症例、ALP 462 U/L 以上の症例、LDH 500 U/L 以上の症例は、それぞれそうでない症例に比べて有意に非再燃率が低かった。生検病理の Gleason score (GS) が 8 以上の症例は GS7 以下の症例に比べて、また骨シンチグラムで骨転移の広がり (EOD) が 1 以上の症例は EOD 0 の症例に比べて有意に非再燃率が低かった。多変量解析では Hb と PSA が有意な独立因子であった。【結語】ホルモン治療が施行された進行性前立腺癌において、治療前の Hb と血清 PSA 値は再燃を予測する因子であることが示唆された。

P1-14.**民間精神科病院におけるアウトリーチ活動について**

(柏崎厚生病院・精神医学)

○野村健太郎、鈴木 康一、松田ひろし

当院では、昭和 63 年から精神科の訪問看護に取り組んでいる。平成 8 年に訪問看護ステーションの認可を受け、それまで「支援チーム」として病棟看護師が病院からの訪問看護を行っていた形から、事業所スタッフによる独立した活動に変化した。現在では作業療法士も選任で配置され、看護師 7 名、准看護師 2 名、作業療法士 2 名の計 11 名のスタッフが従事しており、平成 22 年 6 月の時点では訪問件数は 800 件を越えている。

地域で生活をしている療養者の支援は病院と言う医療の形だけでは難しく、訪問看護などのアウトリーチが必要不可欠となる。病院では医師、看護師、心理士、薬剤師、作業療法士、精神保健福祉士などの職種がチームを作ってケアを提供している。地域においても、様々な職種が利用者と関わる事が重要となるため、サービスを利用できるように包括的に援助をするケアマネジメントが重要と考えられる。

今回、当院での訪問看護の現状を提示し、そこから示唆される課題について考察を述べたい。

P1-15.**柏崎厚生病院における抗精神病薬単剤化の現状**

(柏崎厚生病院)

○赤羽 学爾、吉浜 淳、星野 紀子
野村健太郎、結城 麻奈、直井 孝二
鈴木 康一、松田ひろし

【背景】統合失調症の薬物療法として、日本では以前より抗精神病薬の多剤併用投与が広く行われており、従来の定型抗精神病薬から新しい作用を持つ非定型抗精神病薬に主流が変わってからも、この傾向に大きな変化はない。多剤併用による多くの副作用は、統合失調症患者の社会復帰を阻害する要因の一つとなっている。

【目的】立川メディカルセンター柏崎厚生病院は新